

2019年度 本州太平洋におけるサケ回帰状況 (第2報：1月31日現在)

国立研究開発法人水産研究・教育機構
東北水産研究所 沿岸漁業資源研究センター

本州太平洋側のサケ来遊数について、1月31日現在の状況(最終報)をお知らせします。

1. サケ来遊概況

1月31日現在の本州太平洋側(竜飛岬から東の青森県～茨城県)におけるサケ来遊数(沿岸漁獲数と河川捕獲数の合計)の累計値は169万尾(前年同期:28%)と前年を大きく下回り、平年同期(1989～2018年の平均値、1323万尾)との比較では13%という状況であり、1989年以降で最も少なくなっています(図1)。

河川捕獲数の累計値は21万尾(前年同期:28%)と前年を大きく下回り、平年同期(125万尾)との比較では17%となっています。

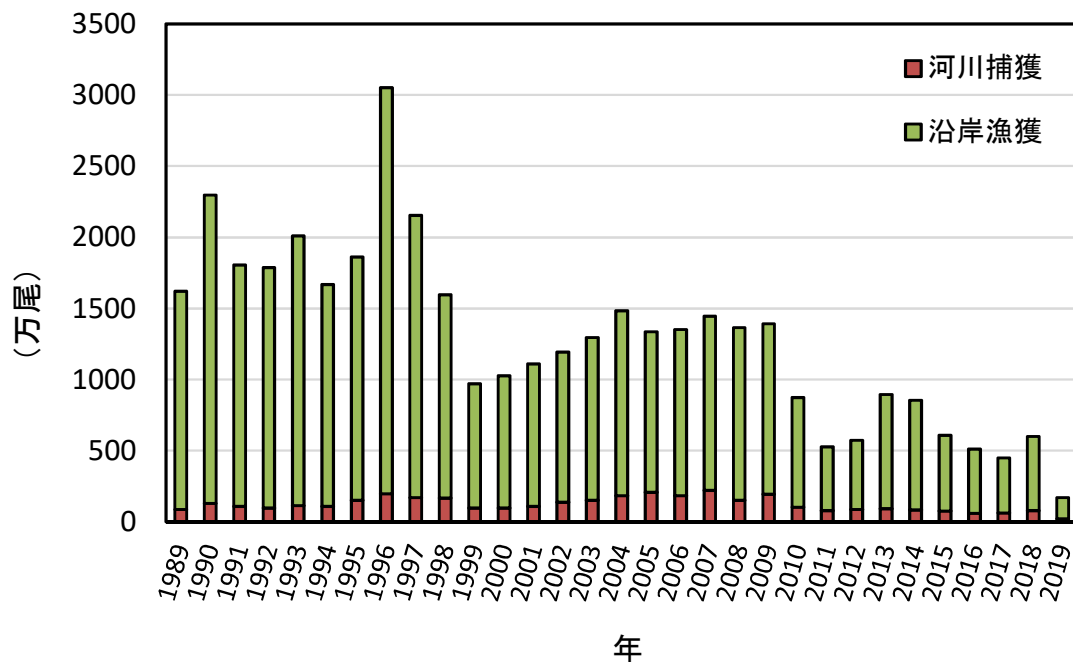


図1 1月31日時点の本州太平洋側におけるサケ来遊数(累計値)の経年変化

2. 年齢別河川捕獲数

本州太平洋側の主要河川のうち、年齢が判明している11河川(図2左)について、年齢割合に河川捕獲数を乗じて、過去10年間で比較しました。

青森県

2019年の4年魚の捕獲数は、いずれの河川においても前年を大きく下回っており、過去10年間で最も少なくなっています。3年魚は川内川では過去10年間で2番目に多くなっている一方、奥入瀬川では過去10年間で3番目に少なく、新井田川では過去10年平均値より少なくなっています。5年魚は川内川及び奥入瀬川で2番目に少なく、新井田川では、過去10年間の平均的な値となっています。捕獲数全体としては、川内川では過去10年間で3番目に少なく、奥入瀬川及び新井田川ではいずれも最も少なくなっています（図2右）。

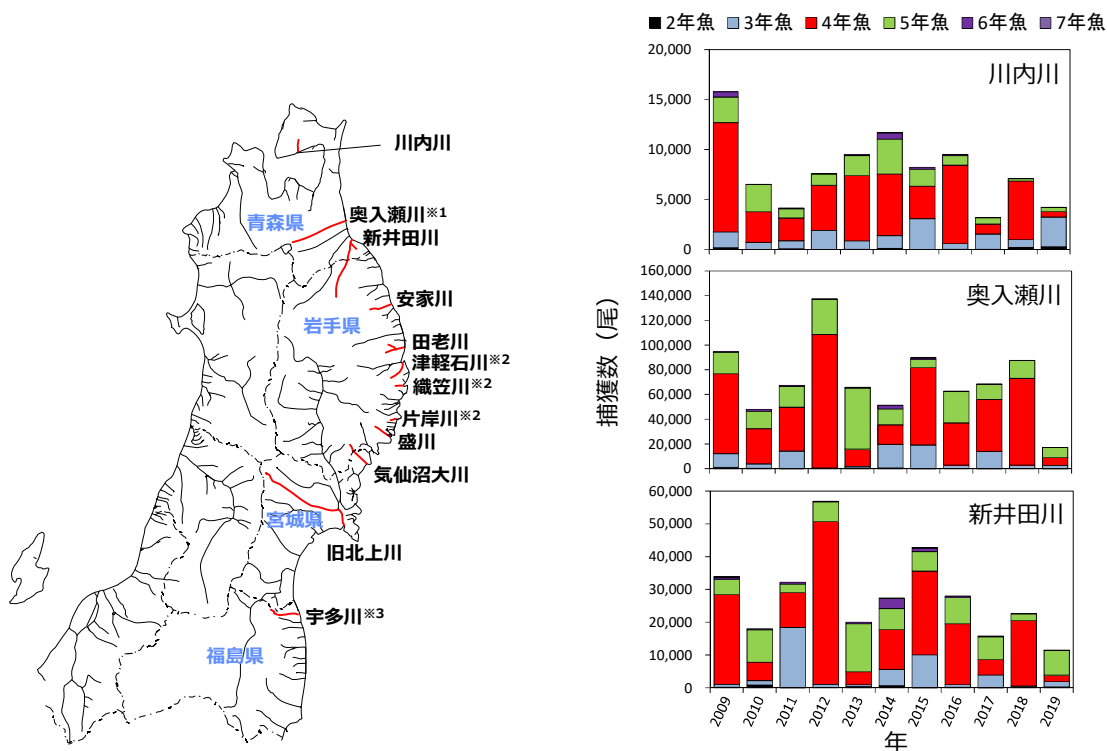


図2 調査河川（左）及び青森県調査河川の年齢別河川捕獲数（右）
（全て1月31日現在までの累計値）

- ※1：地方独立行政法人青森県産業技術センターのデータ
- ※2：岩手県水産技術センターのデータ
- ※3：宇多川は台風被害のため、今期は年齢調査を実施していない

岩手県

2019年の4年魚の捕獲数は、いずれの河川においても前年を大きく下回っており、過去10年間で最も少なくなっています。3年魚は、津軽石川、織笠川及び盛川では過去10年平均値より多くなっていますが、田老川及び片岸川では過去10年平均値より少なく、安家川は過去10年間で最も少ない状況です。5年魚は安家川で過去10年間の平均的な値となっているほかは、いずれの河川も1～3番目に少ない状況です。捕獲数全体としては、全ての河川において過去10年間で最も少なくなっています（図3）。

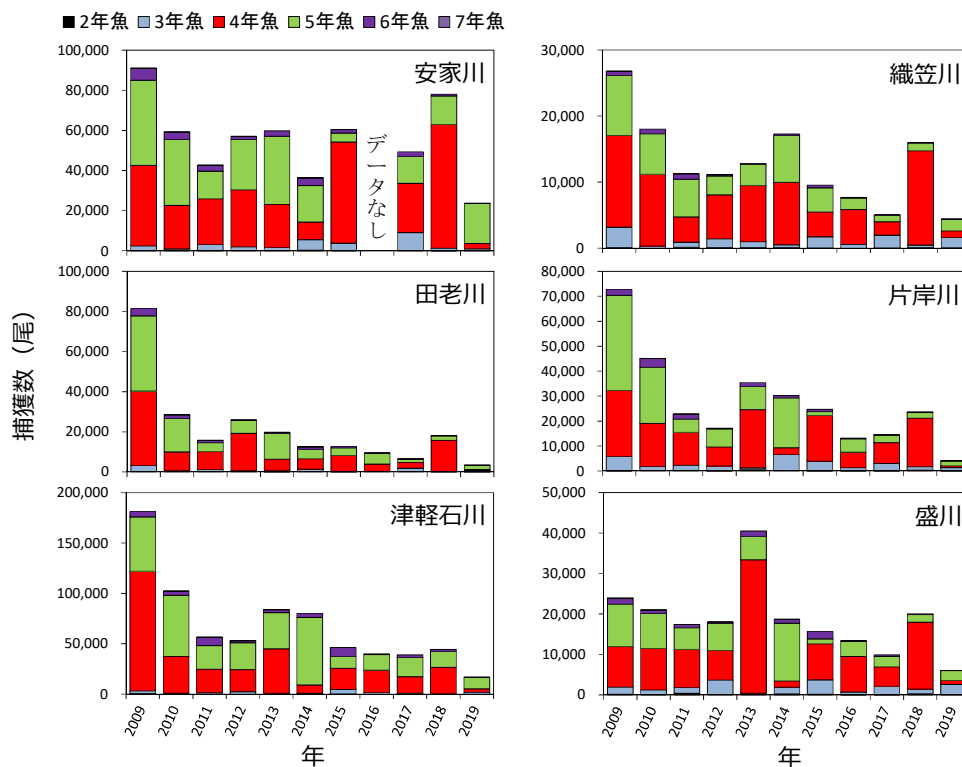


図3 岩手県調査河川の年齢別河川捕獲数 (全て1月31日現在までの累計値)

宮城県

2019年の4年魚の捕獲数は、気仙沼大川及び旧北上川の両河川とも前年を大きく下回っており、過去10年間で最も少なくなっています。一方、3年魚は気仙沼大川では過去10年間の平均的な値、旧北上川では4番目に多くなっています。5年魚は、両河川とも過去10年間で3番目に少なくなっています。捕獲数全体としては、両河川とも過去10年間で最も少なくなっています (図4)。

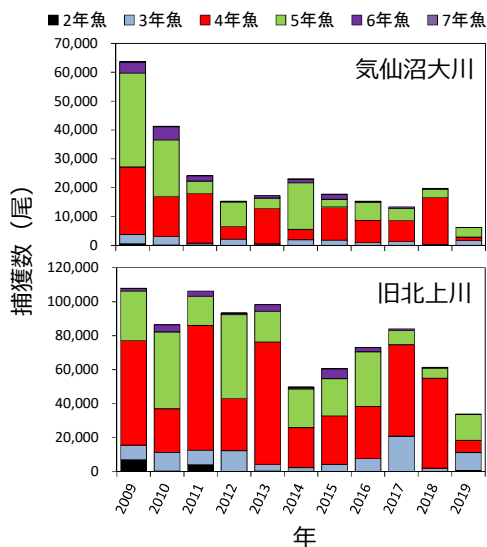


図4 宮城県調査河川の年齢別河川捕獲数 (全て1月31日現在までの累計値)

3. 年齢別来遊数

上記、11河川の年齢組成情報を基に本州太平洋側における年齢別の来遊数を推定し、過去10年間で比較しました。

主力となる3年魚、4年魚、5年魚はそれぞれ前年同期の209%、7%、100%となっており、4年魚の減少が際立っています。過去10年間では、4年魚が最も少なく、5年魚、3年魚もそれぞれ2番目、4番目に少なくなっています(図5)。このように、4年魚の来遊数の顕著な減少に加え、他の年齢の来遊数が少ないため、全体の来遊数が極端に落ち込みました。

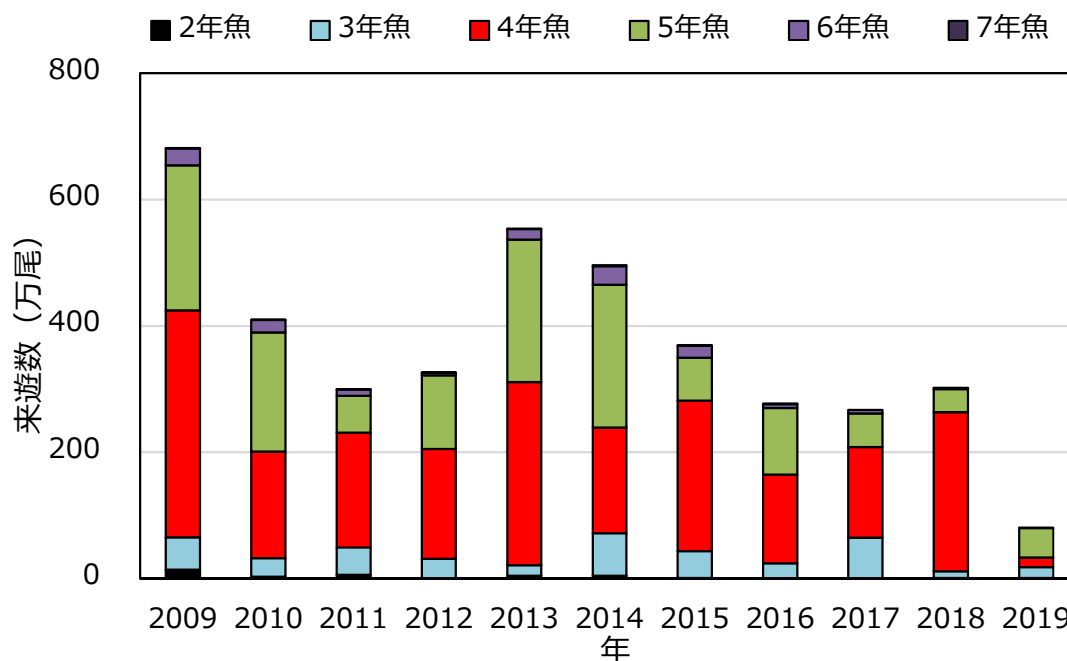


図5 1月31日時点の本州太平洋側におけるサケ年齢別来遊数(累計値)の経年変化